**外国人患者の支援を難しくさせる3つのキーワード**

**～富士市立中央病院における外国人患者の事例分析～**

富士市立中央病院　○前嶋真理子　江村宏子　佐藤理絵　遠藤卓馬

**要旨**

2020年には東京オリンピック・パラリンピックが開催され、昨年末の国会では外国人材の受け入れを拡大するための法案が成立した。今後、多くの外国人が来日することが予想され、外国人が医療機関を利用する機会が増えることが併せて想定される。クライエントが外国人の場合、日本国籍のクライエントと比べて、支援が難しいと感じることが多い。外国人クライエントの支援を難しくさせているものは何か、その要因になるものを明らかにすることで、対策を検討できるのではないかという仮説をもとに事例分析を行った。

**１ 目的**

医療機関で外国人支援をもっとスムーズに行えるよう、困難感になっているものを明らかにし、対策を考察する。

**２ 方法**

　当院に勤務する4名のMSWが対応した2017年4月1日～2018年8月31日の外国人ケースの中から特に困難感を感じた6ケースを選出する。①相談内容を文章化し、同一のフォーマットにまとめる。②支援が困難と感じた部分を抜き出す。③その要因への対応策を表にまとめ、キーワードを抽出する。④キーワードをもとに事例を見直し、対策と留意点を検証する。

なお、本研究では個人が特定されないよう倫理的配慮を行っている。

**３ 結果**

支援の困難感を大きくさせる「言語」「保険」「在留資格」という3つのキーワードを見つけ出した。

**４ 考察**

　「言語」「保険」「在留資格」は外国人患者の支援では欠かせない要素と言える。特に「言語」は意思疎通をはかるための重要なツールである。病状の理解や治療を行う上での説明と同意等必須の要素となる。そこで、通訳の手配は医療機関において重要な支援のカギになる。医療機関に課せられる救命という使命の中、限られた時間で対応を迫られるため、外国人支援を行う上で困難感として大きな要因になることが認識できた。また、だれにどのように通訳を依頼するのかは、日本語がわかる家族であっても医療用語の理解の不十分さや利害関係が背景にある場合、留意する必要がある。特殊な分野の通訳にたけていて、中立性を保持している医療通訳という存在は、有用であることを再確認した。「保険」や「在留資格」については、無保険や観光visaで来日しているというある一定の状況下で問題が顕在化することが確認できた。

**５ まとめ**

　「言語」「保険」「在留資格」という要素に的確に対応できるようになると困難感は確実に軽減される。一方で「転院」「精神科の診療」「緊急性」等外国籍、日本国籍を問わずクライエントの置かれている状況、家族背景等個別の事情によって生じる問題があることも明らかにできた。外国人特有の問題にはその分野の知識や情報収集を重ね支援の準備を行うことが重要である。また、それに加え外国人というステレオタイプでクライエントの問題をとらえるのではなく、一個人としてクライエントと向き合い、信頼関係を構築し、アセスメントを行い、ニーズから必要な支援を導き出していくというソーシャルワークの基本的な姿勢も重要であることを再確認した。

**参考文献**

社団法人日本社会福祉士会　編集「滞日外国人支援の実践事例から学ぶ　多文化ソーシャルワーク」中央法規（2012）

竹中勝信　編集「医療現場ですぐに役立つ　外国人患者対応マニュアル」メジカルビュー社（2017）